

Title	<紹介>蜂矢真郷著 『古代地名の国語学的研究』
Author(s)	中野, 直樹
Citation	語文. 2017, 109, p. 80-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/73314">https://hdl.handle.net/11094/73314</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

蜂矢真郷著『古代地名の国語学的研究』

中野直樹

本書は二十巻本『和名類聚抄』（以下、『和名抄』・『風土記』）を中心にそこに見られる地名について、表記・語構成・音韻の面から国語学的に考察したものである。

著者がはしがきで述べるように、第一・二篇は『和名抄』における地名が中心となっており、第三章以降は『和名抄』の地名に限らない考察となっている。本書の構成は以下の通り。

はしがき

第一篇 和名抄地名の構成と表記

第一章 和名抄地名の構成

第二章 和名抄地名の二合仮名

第三章 和名抄地名の読添え

第四章 和名抄地名の音訓混用

余談・一 琵琶湖の東西の山

第二篇 和名抄地名の訓注

第一章 和名抄地名の訓注の仮名

第二章 和名抄地名の訓注の促音・撥音等

第三篇 地名の二文字化

第一章 三字地名の二文字化

第二章 一字地名の二文字化

第三章 和名抄地名における「部」

余談・二 変化する地名

第四篇 地名とその周辺

第一章 和名抄・名博本の地名の傍訓

第二章 風土記地名と和名抄地名

第三章 地名と上代特殊仮名遣

第四章・チ「路」とミチ「道」

あとがき

索引（地名索引・語彙索引・事項索引）

第一篇第一章では二字の地名を前項と後項に分け、項末にどの音節がくるのか、項の位置によつて音節に偏りはあるのか等、語構成上から分析する。また、章末には前項と後項に用いられた漢字の読みを五十音順で列挙する。

同篇第二章では、二合仮名（鼻音・入声の韻尾に母音を加えて音仮名とするもの。例、相馬佐字方・邑樂於波良支）について、前項・後項に分けて韻尾ごとに検討し差異を見る。

同篇第三章では、連体助詞「ノ・ツ・ナ・ガ」及び序数詞「ツ」の読み添え語（漢字の読み添えるもの。例、上野加三豆・八代夜豆志呂）にどのような分布が見られるのかについて考察する。

同篇第四章では、地名の読みの音訓について特に問題となる字

を例に取りあげている。また、第一篇末には余談として「伊吹山」と「比叡山」についてそれぞれ述べられている。

第二篇第一章では、『和名抄』の訓注が取り上げられ、万葉仮名で表記された地名の表記にどの漢字が用いられているかが検討されている。

同篇第二章は訓注の内、促音・撥音表記の例が列挙されている。この章では、訓注の促音・撥音表記についての先行研究も纏められている。

第三篇より『和名抄』以外に『風土記』等を用いた考察が行われる。同篇第一章では、三字の地名が二字に改められた際に、特定の字を伴う地名及び、二音節を一字で表わした地名を整理する。同篇第二章では、一字地名の二文字化の例を中心に地名が整理される。

同篇第三章では、地名に「部」字を伴う地名を中心に考察している。第三章末には余談二として富雄川と遠里小野の地名の変遷が取り上げられている。

第四篇第一章では、『和名抄』諸本のうち、高山寺本と名博本の訓注を用いて、先行研究で必ずしも明確にされてこなかった、両書の地名の関係について考察が行われ、先行研究の結果を補強する。

同篇第二章では、『風土記』と『和名抄』の地名を比較する。

章末には『風土記』と『和名抄』に見られる地名の表記及び訓注の対照表が付されており、比較に便利である。

同篇第三章では、枕詞や地名起源説話に見られる地名表記における上代特殊仮名遣いについて検討する。

本書最後となる同篇第四章は、「路」チと「道」ミチの訓みについて考察する。同章では「ミ」を接頭語とする地名、地名＋「チ」とする地名についても検討されている。

以上、本書の内容について極簡単に概観した。本書は『和名抄』や『風土記』に見られる古代の地名について、多方面に論が展開している点に特色がある。また、一々の用例が列挙されており（索引もある）、地名研究以外に、辞書史研究の面から見ても追試がしやすくありがたい。本書には『和名抄』の用例が多いので、先に『和名抄』諸本本文の体裁を見ておくと、理解がスムーズであろうと思われる（本書で扱われる諸本はいずれも影印で本文を確認できる）。

本書で検討されたことを踏まえて、『和名抄』の地名表記が他の二十卷本間でのようになっていたのか、また、『節用集』をはじめ、他の古辞書に見られる地名の読みと比較した場合、本書の考察がどのように活きるか等、ここから展開する論はいくつも

ある。  
（和泉書院、二〇一七年三月三十一日初版第一刷発行、三七六頁、定価一一、三四〇円（税込））

（なかの・なおき 本学大学院博士後期課程）